

定年後の気ままな充実した京都生活

選考委員長 村野 健太郎



昨年度末、3月31日に70歳で、法政大学 生命科学部 環境応用化学科を定年退職しました。

その後、約1年間（4月から翌年度5月末までの予定、14ヶ月）、単身で京都に移り住んで（京大の近く、百万遍交差点の近く）います。京都の神社仏閣を見てフィールド科学教育研究センター研修員（無給、授業料を払う）で京都大学農学部教授 徳地直子先生（森林生態系保全学分野）の研究室に所属しています。

やっと京都暮らし（比叡山を見るとうれしい、鴨川の水を見ると心が和む、賀茂川と鴨川の区別がつく）、京大の生活に慣れてきました。

京大には週に約3日間行きます。院生部屋に机、1個と本棚少しのスペースをもらいました。（月曜日）10:00-12:00、森林情報学ゼミ、12:30-14:30、森林育成学ゼミ、（火曜日）10:30-17:30、自分のことを行う、（木曜日）10:30-12:30、京都大学地球環境学堂 大気環境化学論分野 梶井克純研究室ゼミに出席しています。

神社仏閣巡りも順調です。

京都では、これまでの40年間の総括し、これからの人生を考える予定で居ます。

で何故、どんな経緯で京都に移り住んだかを述べさせていただきます。

昔から京都は好きでした。でもただ好きなだけなら多くの人がそういう気持ちを持っていると思います。大学の定年が近づいて来た時、以下のように考えました。

私の希望（野望）で、退職後、京都に14ヶ月住みたいと言うことです。

- ①京都の神社仏閣をゆっくり見たい
- ②桜と紅葉をゆっくり見たい
- ③京都の空気を吸っていたい
- ④京都大学で生活したい（学生気分）

問題点も費用、自宅の管理とありましたが家族は両手を上げて賛成してくれました。（無料で、何時でも泊まれるホテル（質素ですが）が確保できる。観光客が多くて京都のホテルは高いし、なかなかとれません。）

私の希望は、一つは京都大学に所属したいと言うことでしたが、まず学生として入学することはできません。大学入試への学力が足りず、大学入試では絶対合格できません。大学院生として所属するのも修士課程であれば、やはり入試では合格できません。博士課程なら面接だけで良く、合格できるかもしれませんが、博士課程の大学院生は研究しなければなりません。私は十分に研究をしてきたので、研究をしたいわけではありません。今、

京大に所属していることを誇りに思うと同時に心の底からわき上がる喜びに浸っています。山紫水明の古都に抱かれた最高レベルの大学で、歴史の重みを全身に感じる生活は何物にも代え難いです。

もう一つは京都の神社仏閣を見て回りたい。というか京都の気候を肌で感じ、風を味わい、空気を吸いたいというのが本音かも知れません。そういう意味で有名な神社仏閣を見て歩けば、それで満足というわけではなくて、その辺の路地を歩いても「ああ、これが京都だ」という想いで歩くと、それで十分満足なのです。京都の街というのは平安京が出来てから、ずっと都であり続けてきたわけ、そこは色々な歴史上の舞台にもなりました。またその歴史に関してもいろいろ思い入れがあります。



血湧き肉躍る勇壮な祇園祭の山鉾巡行（7月17日）

これまでも仕事とか観光を含めて京都には、もう20~30回来ました。けれどもそれは仕事ということとか、観光ということで一泊二日、二泊三日で、ある一か所か二か所の見たいところを見て帰ったというのであって、京都の風を感じ京都の空気を定常的に吸うという行為ではなかったのです。京都に住んで京都の風を感じ、京都の空気を吸い、京都の気候を肌で感じる、そのことが私にとっての喜びであり、満足でもあります。

私が大学院に入った頃1970年代は京都がアバンギャルドな街として、自分達の読むような雑誌に取り上げられていて、気に入って京都には行きました。そんなミーハーと言われるかも知れませんが、喫茶店「イノダ」のコーヒーは味も店の雰囲気も大好きでした。イノダは改築前は本当に雰囲気がありました。



遙かに見る五山送り火（大文字）（8月16日）

もう一つの京都への思い入れは、江戸時代末期、幕末と言われる時代にここが明治維新への変革を促す場であり、私の出身地、薩摩藩は遠く離れた地であるにも関わらず、京都の街で大活躍をしました。西郷隆盛、大久保利通やその他の有力藩士、それから島津久光、そういう人達が色々な場面で政治を動かしました。また寺田屋事変みたいな血で血を争う凄惨な事件もあり、それらは産みの苦しみだったとは思いますが、そういうのを踏まえて明治維新という

ものになったのです。薩摩の先輩達が、この地で大活躍をし、世の中を変えたというところは、やはりこの京都の風を感じたく、空気を吸いたく京都の気候を肌で味わいたい、五感で味わいたいという私の一つの大きなよりどころであるということになります。

ある時（60歳代）から源氏物語に興味を持って、もちろん源氏物語は高校時代に古文で習うわけで、「いずれの御時にか、女御、更衣あまたさぶらひたまひける中に、いとやんごとなき際にはあらねど、すぐれて時めきたまふありけり」というような導入部分は、皆覚えます。だけど、もちろんその後ずっと忘れていましたが、漫画「源氏物語」を12巻買いそろえて、ともかくも何回も読みました。この源氏物語もほとんど京都が舞台で、そこで繰り広げられる光源氏と光源氏を取り巻く人々特に女性陣の物語が非常に面白くて心がわくわくします。

源氏物語の中には京都の色々な場所が出てきます。源氏物語の舞台になった所は本当に心底訪ねてそこを味わいたいと思っています。しかも季節を選んで行かなければ意味がありません。桜の名所あり、紅葉の名所あり、はたまた雪が降った時の雪の名所あり、普通の時の名所あり。様々であるので、それを見に行くためには必死で日程を組まなければならないと思っています。

元国立環境研究所酸性雨研究チーム総合研究官